月曜評論

ソ連・モンゴル・中国を訪ねて

中嶋嶺雄

この冬休みを利用しての海外学術調査旅行のために、昨年十二月下旬、単身日本を発った私は、ソ連、モンゴル、中国の三つの社会主義国の首都にそれぞれ約一週間ずつ滞在し、このほど帰国したばかりである。今回の旅行の目的は、「アジアの冷戦と中ソ対立の歴史的構造」かんする私自身の研究課題を裏付けるためのものであったが、今日の厳しい中ソ関係、中蒙関係にもかかわらず、これら三カ国を同時に訪問することができたことは、いわば例外的な幸運であった。

◎……☆……◎

モスクワで新年を迎えたあと、厳寒のシベリアは悪天候のためバイカル湖北二五〇㌔のブラーツク空港で一夜を過ごし、翌日イルクーツク経由でモンゴル人民共和国の首都ウランバートルに着いた。ウランバートルもシベリア以上の寒さで、日中でも零下十五度、夜間は零下四十度に達し、そのうえ流感が猛威をふるっていて、すべての公式行事が中止されていたが、第二次大戦後、この地で果てた約三千名の日本人抑留者の霊場を郊外の雪の草原のただなかに訪れたとき、いま一人の日本人がこの寒さに耐えるのは当然の責務でもあると感じた次第である。ウランバートルからゴビの砂漠、内蒙古を越えて集寧、大同、張家口を経由し、北京まで一八〇〇㌔の三日間にわたる汽車の旅は、しばしば外国旅行を経験する私にとっても、数々の印象深い旅行であった。

北京は一九六六年秋の文化大革命の激動のさなかにそこを訪れて以来、八年ぶりの訪問であったが、その変化の大きさとともに、懸案の全国人民代表大会がすでに開幕もしくはその直前である状況を実感することができ、これまた私にとって貴重な体験であった。このようなコースであったため、モスクワを元日に発ってから、上海経由の中国民航機で帰国するまで、つねに日本人客は私一人であったことはもとより、ほとんど乗客のない旅行はかりであったが、中ソ対立下の今日において、専門研究者がこのようなコースをたどることができたことも初めてであったらしく、私はいま、今回の旅行体験をどのように整理したらよいのか、いささか戸惑っているところである。

◎……☆……◎

この三つの社会主義国を訪れて、同じく社会主義とはいいながら、その差異の大きさにいまさらながら驚いたが、とくにロシア民族、モンゴル民族、漢民族という、いずれも世界の歴史に巨大な足跡を残してきた三民族に固有の民族性と文明の差異、そして、そのような差異を有する三つの民族国家がユーラシア大陸を縦貫して併存していることそれ自体がもつ歴史的意味の大きさは、われわれ日本人にはとうてい理解しがたいものがあるように思われる。

もっとも、四年ぶりに訪れたソ連は、いうまでもなく世界の超大国、社会主義の最先進国でありながら、いわゆる西欧化への民意の流れがさらに進んでいるように感じられ、中国の主張をそのまま受けいれることはしないにしても「資本主義の復活」と見られるような傾向は随所に目立っていた。とくに、われわれ先進工業民主主義国の内部で批判の対象となりつつある物質面での豊かさ、高度な消費生活への憧憬は、もはやとめどもない潮流になりつつあり、イデオロギーからの解放が社会的進歩への暗黙の合意にさえなりつつあるようだ。

中ソ両大国のはざまに位置するモンゴルの状況は草原と包(パオ)とか遊牧国家とかいう日本人のロマンチックな幻想にもかかわらず、生活の面でも、イデオロギーの面でも、きわめて厳しいものがある。生活面での厳しさは日曜青空市場を実際に見た者にはすぐに実感されるところであろうが、ウランバートル市内の唯一のデパートに、おそらく中国からバーター貿易で入ったものであろうミカンを、一つずつ買うために行列している風景からも察せられるところである。イデオロギー面については、モンゴルの科学アカデミーの正面に、今日でも巨大なスターリンの銅像がそびえ立っていることを指摘するだけで十分だと思う。

それに比べると中国は、少なくとも北京をみるかぎり別世界である。王府井の東風市場や東単の市場の品物の豊富さはその一例にすぎないが、文革時のように毛語録を読んだり、毛著作を学習している現場をついに見ることができなかったばかりか、三日間の汽車旅で仲よしになった列車員やホテルの服務員も暇さえあればトランプと雑談に興じていた。政治面でのあの俺風や厳しさと民衆の生活実態における脱政治傾向の著しさとのこのギャップを、偉大な指導者にたいする民衆の信頼の強さのゆえとみなすべきか、中国民族に伝統的な政治観、つまり「帝力いずくんぞ我にあらんや」といった特性に求めるべきか、やはり大いに議論の別れるところであろう。

◎……☆……◎

いずれにせよ、これら三つの社会主義国にあって重要な問題の一つは、社会主義的平等ないしは均一化傾向がもたらす諸矛盾、ある意味での悪平等の矛盾と一部幹部の特権化といった問題であり、この点は、中国社会においても決して他人事ではない。「批林批孔」運動が叫ばれる理由の一つもこの辺にあることはたしかだが、このような社会主義の現実を相対的かつ冷静に比較しつつ、われわれ自身の社会がもつ長所についてはそれを胸を張って再確認し、その長所を擁護するための責任と自覚を新たにすることが必要ではあるまいか。日本社会の欠陥を批判することだけが革新的であるかのような惰性に陥っていてはならないように私は思う。

(東京外語大助教授)